競技者の語りにみるスポーツと地域の関連性
―ハンドボールの活動的地域を事例に―

三輪　将太郎

ハンドボールは日本国内において、競技人口を他の団体球技と比較すると、その数が圧倒的に低く、国際大会等で好成績を収めることも少ない。そのため、メジャーな競技とは言い難い現状があるが、国内において高い活況度を持つ地域は存在している。このように、ある特定のスポーツ種目が盛んな地域には、そのスポーツが「文化」として根付いており、地域の環境がそのスポーツおよび競技者に影響を与えているのではないか。先行研究では、地域とスポーツの関係性を、研究蓄積や既存の政策などから考察する研究は行われているが、そのスポーツに関わる主体としての競技者に焦点を当てた研究はほとんどされていない。そこで本研究では、ハンドボールにおいて高い活況度を持つ沖縄県と富山県を「活動的地域」として捉え、活動的地域出身の競技者に焦点を当て、彼らのライフストーリーをもとに、活動的地域の地域性が競技人生にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とする。それらを通して、スポーツと地域の関わり方について、活動的地域以外にも通じる知として、明示的に描き出す。

本研究では、活動的地域出身の競技者一人一人のライフストーリーに焦点を当てるため、半構造化インタビューを行った。調査対象者は、「ハンドボールの活動的地域」として捉える沖縄県および富山県出身で、関東圏の大学に進学し、ハンドボールを続けている大学生 4 名とし、1 回 60 分前後のインタビューを、各 3～4 回ずつ行った。調査は、研究倫理審査が承認された 2020 年 4 月 30 日から 2020 年 12 月 31 日の期間に行った。

本研究の調査から、以下のような内容が明らかになった。（１）活動的地域出身の競技者がその地域内で競技をしているときは、その活況度の高さが当たり前の環境になっていた。また、自身の出身地域の活況度を把握したのは、その地域を離れ、これまでと違う環境で競技をしたときだった。（２）活動的地域出身の競技者が、自身の出身地に対して持つ価値観として、地域特有のプレー感があることや、地元に対して強いブランド意識があった。それらの価値観も、自身の出身地域を離れ、これまでと違う環境で競技をすることで得ていくものであった。（３）調査対象者の一部は、その地域の高い活況度が原因で、苦悩を伴った競技人生を経験していた。それらは、競技者にとって苦しい出来事だったが、今現在持つ出身地の価値観と、肯定的に結びつくものであった。

上記の内容から、活動的地域出身の競技者は、自身の競技人生が構成される過程の中で、活動的地域に対する価値観を相対化する視点を得ていくと考えられる。しかし、その地域内で競技をしているときは、活況度の高い環境が当たり前だったことから、これら相対化する視点は、競技者が自身の出身地域にいるときは潜在しており、その地域を離れたときに顕在化されることがわかった。

（指導教員　照山絢子）